

2014.2.23 出発

8 日間コース

第4回

PHJカンボジアスタディツアー

終了報告書

# カンボジア

農村、保健をテーマに学ぶ

11人

の楽しい日本犬が

8日間

笑いあり、涙あり!?のツアーを体験しました

もっととディープに、  
もっとアクティブに  
学びたいあなたへ



# PHJ2014カンボジアスタディツアー終了報告

## はじめに

2014年2月23日から8日間の日程で「カンボジア×農村×保健」というテーマのもと参加者を募り、スタディツアーを実施しました。

内戦の傷跡が残るカンボジアで人々の健康や暮らしはどうなっているのか、といったことをピープルズ・ホープ・ジャパンの支援対象地のカンボジア コンポントム州の病院、保健センター、農村を中心に訪問し、見学・インタビューなどを通して理解を深めるツアーです。

PHJのスタディツアーの特徴は、フィールドを歩いて、見たり、聞いたりするだけではなく、ツアーで学んだことを、最後に現地の人の前で発表する、というところです。おそらく、参加者の方にとっては、慣れない土地で初対面の参加者とともにゆっくり休むことなく夜遅くまで発表の原稿をまとめる・・というなんともハードなツアーかもしれません。そうした厳しいスケジュールの中で毎回しっかりと提案をしていただきます。

そして今回参加者は2つのグループに分かれて提案していただきましたが、どちらのグループもPHJのスタッフでは思いつかない新しいアイデアで、かつその伝え方も、ロールプレイ、絵、実演などわかりやすいものでした。参加者の何とかしたいという気持ち、そして、現地の人への配慮がしっかりと伝わるプレゼンテーションで、とても心を打たれたことを覚えています。

この冊子にはスタディツアーに参加いただいた方をお願いをして、ツアーの感想を書いたいただき、報告書としてまとめたものです。スタディツアーではこうした参加者との出会いから多くのことを私たちが学ぶことができる貴重な機会なのです。今回参加いただいた9名の方々に御礼を申し上げます。

また、訪問先の国立母子保健センターの担当者の方々、サンボークレイクック遺跡を案内して下さったティアリーさん、バライサントック地区の病院、保健センター、農村の皆様、スタディツアーを受け入れていただき、ありがとうございました。

このスタディツアーの記憶を記録としてとどめておきたい、と思い参加いただいた方をお願いをして、ツアーの感想を書いたいただき、報告書としてまとめましたので、ぜひご一読ください。

2014年5月30日  
広報 南部道子





# PHJ2014カンボジアスタディツアーの8日間をたどって

## 1日目(2/23) カンボジア プノンペンへ!

成田発→ベトナム経由で  
プノンペンへ。ベトナム空  
港で参加者全員集合。  
自己紹介とこれからの全  
体の流れを説明。レッツ、  
スタディ!



## 2日目(2/24) 国立レベルの医療と内戦の歴史を見学

プノンペンでは国立レベルの医療サービス  
を見るべく、**国立母子保健センター**を見学。  
JICAの担当者の方が説明してくださいました。  
分娩室の見学時に、一部の参加者はちょ  
うど分娩の瞬間を見ることができました! 国  
立レベルの病院内は、清潔ではあるけれど、  
日本と比べると質素。  
さらにキリングフィールドとトゥールスレン虐殺  
博物館を見学し、医療環境を含め国全体  
に大きなダメージを与えた**カンボジアのポ  
ルポト政権による内戦**とはいったいどのよう  
なものだったのかを、リアルに学びました。  
午前中は「生」を、午後は「死」をまじかに感  
じた、精神的にもタフなスタディの初日でした。



## 3日目(2/25) 遺跡と農村をめぐる

プノンペンからPHJの支援地のあるコンボントム州へ移動。コンボントムには世界遺産候補のソンボーブレイック遺跡を見学。実際に遺跡の修復を行っているティアリーさんから日本語で説明を受けました。アンコールワットよりも古い遺跡は森の中にあり、とても神秘的でした。さらに、農村の様子をみるため、車を止めて、赤ちゃんのいる女性にインタビュー。ぶくぶくと健康そうな赤ちゃんでした。



## 4日目(2/26) 農村の保健を知る(病院・保健センター見学編)

農村地の保健状況を知るため、ま  
ずは郡病院、保健センターを見学。  
院長などがスタッフの数や患者の  
数などのデータを説明して下さ  
ったあと、施設内を見学しまし  
た。医療者の数が少ないことは  
もちろん、建物や設備など、圧  
倒的に数が少なく、質素でした。



## 4日目(2/26) 農村の保健を知る(農村でインタビュー編)

参加者は二つのチームに分かれ、村のキーパーソンへのインタビューを行いました。村長さん、母子保健ボランティアさん、伝統的産婆、妊婦、伝統医などにお話を聞き、保健状況を聞きました。興味深かったのは、村人は保健センターや病院も利用しながら、薬草を使う伝統医についても深い信頼を寄せていること。西洋医学と伝統的な医学をバランスよく使い分けているといった印象がありました。



## 5日目(2/27) PHJの活動に参加する/プレゼン準備！！

今日はPHJの活動である衛生教育と母子保健ボランティアの育成活動に昨日と同様のチームに分かれて参加してもらいました。衛生教育では手洗いの実演を実施する予定でしたが、事前の調査で手洗いが十分にできているということがわかり急きょ「うがい」の実演をしました。もう一方のチームは母子保健ボランティアの戸別訪問についていき、妊婦さんへの保健教育をしている様子を見学しました。夜は次の日の提案のための準備を夜遅くまで行いました。



## 6日目(2/28) いざ、チームで提案！！

病院長や村のキーパーソンに対して提案を行う日です。衛生教育に参加したチームはうがいの提案と浸透させるための工夫などを模造紙などを書いて伝えました。母子保健ボランティアの活動に参加したチームは、インタビューした妊婦からのニーズをもとに、出産後のケアについてロールプレイで説明しました。双方ともに現実的でシンプルな提案だったために、カンボジアの人たちからも質問があったりして大変反応が良かった提案でした。



## 7日目(3/1・2) アンコールワットを堪能してリフレッシュ！！





# ツアーで出会った人たち









## 参加者のことば

私の今回のスタディツアー参加の目的は2つありました。

1つ目は、参加者の皆さんの熱い思いと行動を通じ、元気と勇気を頂くことでした。2つ目は、現在のカンボジアにおける社会、経済、特に安全衛生環境の実態をこの目で見る事でした。

そしてこの2つの事から「私の第2の人生の活力と明確な方向性」を求めるものでした。

結果として、それは見事に達成することができ、これからの私の人生のステップアップに繋がるものとなりました。特にプノンペンでの国立母子センター、ポルポト時代のキリングフィールドをはじめ、その後のコンポントム州での病院、保健センター、村への訪問で見聞きした衛生環境は、スタディツアーでしか味わえない貴重な視察でした。また村の集会では「うがいの必要性やそのやり方、継続」について村人にプレゼンをし、60人以上の村人にうがいの啓蒙をすると同時に、自分にとっても良い経験をさせて頂きました。

全ての安全衛生を高いレベルにまでもって行く事は出来ません。経済的問題もあり一歩一歩進める中、そこからカンボジア人の後継者を育てるという自立支援の重要性を感じ、その一方で、日本の価値観で、これは良い事であるから改善するのではなく、その村での伝統や文化、プライドなどを尊重する事も大切であり、そのバランスも重要であると感じました。

そして、PHJをはじめ他のNPOやJICA、日本政府など、各階層において懸命に進めているリーダーの育成など、これからのカンボジアの知識人やリーダーを懸命に育てようとしている姿に頭が下がると同時に日本人が本当によく頑張っている事に感激と誇りを持ちました。すべてが一長一短には行きません。一人一人がその立場立場で動き、それが何十人、何百人、何千人となり、最初は小さな波ですが、確実に支援の波が動いている事が実感できました。

今回、カンボジアで経験した熱い思いをいつまでも自分の胸に持ち、常にWarm Heart=Cool Headで、自分が出発することを一つ一つ、日本、世界(特にアジア)に向け社会貢献活動を継続して行きたいと思えます。

その意味でも、このツアーで沢山の燃料を注入し、やる気と元気を頂きました。

PHJ事務局、PHJカンボジアそしてツアー皆さまに感謝申し上げます。  
オークン

公益財団法人職員 伊藤 繁



## ★カンボジアで得たもの withチーム中田！！★

小学生の時、フィリピンのゴミ山で暮らす女の子のドキュメンタリー映画を見たことがきっかけとなり、国際協力に興味を持つようになりました。私からすると、不衛生で毎日食事も満足に食べられない姿は見ていて辛いものがありました。その女の子はいつも笑顔で楽しそうでした。なぜ笑顔でいられるのだろうか、と、素朴な疑問と関心を持ち始め、いつか同じ土地に行ってみたいと思っていました。今回PHJのツアーに参加した目的は、その土地の環境や生きる人々に会いたかったからです。

コンポントム州の村に訪れ、村の方とお話する中で土地に適し、継続可能な支援の必要性を学びました。若い保健ボランティアの方が、「新しい知識を学んで、それで人の役に立てるのは嬉しいです。」とおっしゃっていました。その言葉を聞き、一方的な支援ではなく自分たちの力で継続できるシステム構築の手助けが必要なのだと知りました。また、村に訪問した際、「Do you love your country or village?」と聞いたところ「Yes!」と笑顔で答えて下さいました。私達からすると、衛生環境、食事、教育など介入して改善する余地や必要性を感じますが、実際にそこで生きる方々が幸せでそして笑顔でいられることが何より大切だと思います。NGOの草の根活動は、人々の「笑顔」や役に立ちたいという「思い」を守っていて、それはとても素敵なことでした。国際協力の方法に正解はないと思っています。それは闇の中にいるようで苦しいかもしれませんが、可能性は無限なので面白いことでもあります。このツアーでの多くの素敵な出会いや経験を通して、時に悩み、時に楽しみながら、私に出来ることを探していきたいです。またみんなでディスカッションしましょう！（笑）

カンボジアで出会った方々、モニさん、モップさん、そしてチーム中田のみなさん、このツアー全ての出会いに感謝します♥♥♥名古屋に来る時は、連絡ください！！再会できることを楽しみに、私なりに前に進んでいきます☆  
最後になりますが、中田さん、南部さん、林さん、高橋さん。カンボジアでの8日間、たくさん動いて、笑って食べて、もちろん頭も使ったかな（笑）。そんな貴重な、そして幸せな時間を用意していただき、ありがとうございました。

加藤咲



プノンペンの夕日withかねごん！またこの景色を見に来たいと思いました。次は、何の目的で来るんだろう…。お隣は、村のお家にいた可愛いわんちゃんが、みんなの靴で遊ぶの図。



このツアーで一番感じたものは、「愛」。  
他人同士が国を超えて、その土地に住む人たちの文化や命を支えるために協力する。  
これを「愛」と呼ばずして、何と言おう。

国立母子保健センターで命の誕生を喜ぶ人々。はるか昔の建造物が修復されていく姿。保健行政で活用されるトウクトウク。濾過器やトイレが予想よりも多くあり、手洗いも浸透していた村の現状。うがい提案を受け入れてくれた病院長や村の人々。お互いの体調を気遣い、いい提案ができるよう協力する旅仲間の姿・・・。  
色々な「愛」が繋がった結果を、私はこの一週間で数多く目撃し、体験した。

濃厚なカンボジアでの一週間。  
皆と一緒に心も脳もフル稼働して、出来る限りの愛を注いで、日本に戻ってきた。

まず、国に起こった事実を目の当たりにし、人の傲慢さと弱さに心が潰れた。  
その後、外からの愛を受けて育つカンボジアの姿を見て、私の心も大きく育った。  
知識層がほぼゼロに近い状態だったカンボジアに、生活基盤を整え、歴史的遺産を繋ぐために、沢山の人が集まっている。  
外の人たちが彼らの文化にどれだけ寄り添えるか。  
「愛」なんてキレイな表現では済まされないにしても、その伝え方が大切だ。  
戦前はどのような生活だったのかを、戦後生まれた人は知らない。  
外からの愛が多く届き、道には糞やゴミがあるのが当たり前の中で生まれた人たち。  
今彼らが生きている世界が基準になり、新しいカンボジアが形成される。  
昔日本が通った道と似たようなものが、カンボジアにもあった。  
賢者は歴史から学ぶ。カンボジアには上手に自国文化の継続と発展をしてほしい。

主要都市の建物はほぼコンクリート造りで、道路はアスファルト化している。  
きっとこれから、街の見た目は世界の主要国と同じようになっていくのだろう。

色々な「愛」つながって形を成した時、文化と命は健やかに育つ。  
私たちが提案した妊産婦ケアとうがいと、病院の濾過器設置。命への愛。  
いつ現実になるのかわからない。どのくらい実施してもらえるかもわからない。  
だけど、まずは私たちの愛を受け取ってもらえた。  
カンボジアに届く各種の愛が、彼らの文化に寄り添い形を成すことを祈り、私の出来ることをしていきたい。  
最後に、素晴らしい経験を与えてくれたPHJと仲間達へ、心からの感謝を。  
本当にありがとう！

金子 愛

# ខ្ញុំឈ្មោះខ្លាឃុំ (クニヨーム チュモツホ くま)

中田さん、南部さん、参加者のみなさんお元気ですか？  
日本に帰ってきてから数日経ちましたが、興奮冷めやらぬ毎日です。  
今回の旅は、とにかく驚きと感動の連続でした。

国際協力の現場をみたいという気持ちからツアーに参加したのですが、単に見て学ぶだけでなく、国の保健医療に携わる人々から農村の人々までお話する機会をいただき、プレゼンテーションをするという想像をはるかに超えた“スタディー”でした。とくに印象に残ったことは、TBN、保健センターの助産師、CCMNなどそれぞれの役割を持った方々が、自分の役割を強く主張するのではなく、お互いを尊重しながら高いモチベーションをもって活動されていることでした。PHJによる教育プログラムや研修が、ゆったりと穏やかな雰囲気のカンボジアの人々に、確実に浸透していたことも、正直なところ少し驚きました。

NPOで働く方の思いやバックグラウンドを知ることができたことも、私にとって大きな収穫です。今までは、“私にできることなんてないんじゃないかな…”と考えてしまう自分がいましたが、中田さん、南部さん、林さんとゆっくりお話ができて、それぞれの方の思いや努力を知り、「私もやるぞ…」って気持ちになりました。

参加者のみなさんも、学生から社会人の方まで分野・業種も異なり、視点や捉え方がそれぞれ異なっていてとても勉強になりました。毎晩疲れている中でも、自分の意見も相手の意見も認めて真剣に議論ができたことは、忘れられない思い出になりそうです。短い時間のなかで、情報収集から最終プレゼンテーションまで漕ぎ着けることができたのは、みなさんの周囲への気遣いや優しさがあったからこそだと思います。どうもありがとうございました。

今後、みなさんがどんな方向へ進んで何をされてるのかとっても気になります！またいつかみなさんで旅に出ましょう！

## អរគុណជាច្រើន(オークンチュラー)

熊谷真帆





## 刺激されまくりだった一週間

カンボジアで過ごした一週間は一日一日がとても充実していて、忘れることができない旅となりました。私は将来途上国の支援ができるような仕事がしたいと考えています。しかし途上国について想像することしかできず、漠然とした不安があったため今回参加しました。

しかしツアーに参加してみてそんな不安もどこかにいってしまいました。向こうでの生活は日本と比べてしまうと、停電やトイレの状況、目で見ても分かる空気の汚染状況、識字率の低さ、物乞いをしている人など不便なことやショックなこともたくさんありました。しかしそれ以上にのどかな生活やみんなで食べる美味しいご飯、豊かな自然、人々の温かさ、綺麗な笑顔など言い切れないくらいに素敵などころをたくさん発見し、カンボジアが大好きになりました。不安どころか、将来絶対こういうところに来たいと思うようになりました。

また何と言ってもインタビューや保健指導、プレゼンテーションなど、実際に国際保健協力の活動を見学・体験できたということはとても貴重な体験になりました。最初は本当に緊張と不安でいっぱいでした。しかし実際にやってみると色々知りたいことや伝えたいことが出てきて、みんなで協力して考えて悩むことを心から楽しむことができました。

一歩踏み出すことの大切さを実感し、これからの原動力になりました。そして今まで国際協力は私にとって憧れでしたが、目標になりました。この旅は何がやりたいか具体的に考える良い機会になりました。

最後に、ツアーに参加して一番良かったと思うことが色々な人と出会えたことです。実際に国際協力の場で働いている方々のお話を聞くことや、将来働こうと考えている仲間と出会えたことで自分の中の将来に対するモチベーションが上がりました。また全く違う立場や性格、年齢の参加者の皆さんとお話しできたことはとても良い勉強になったと思います。皆さんのおかげで本当に楽しくて充実した一週間になったと思います。ありがとうございました。

曾根理沙

## カンボジアスタディーツアーに参加して

このツアーに参加させていただくまでは、先進国のNGOの取り組みが本当に必要かどうか半信半疑だった。日本が戦後、教育・文化を他国により変えられてしまったことが、本当に良かったことなのか、まだ自分自身で判断しかねたからだ。しかし、カンボジア国内における妊産婦・乳幼児の死亡率が高かったことが、どれほど村人たちに悲しみを与えていたか、また、体調の悪さが、どれほど村人たちに不安を与えていたか、ということが、インタビューを行うなか分かるにつれ、必要な支援である、と感じた。

今回のツアーの日程は、日本の政府の取り組みにより設立された国立母子保健センターを見学した後、コンポントム州へ移動し、村での病院・保健センターの役割について知る、というものだった。JICAといった国の政策的目線による取り組みから、NGOによる地元目線による取り組みへと見学の場が移ったことにより、カンボジアにおける母子保健の状況がより分かりやすく、理解することができた。

カンボジアの医療は、かつて「伝統医」と「伝統的産婆」に頼っていた。現在でも「伝統医」は存在するものの、「伝統的産婆」はほとんどいない。このことについて、とても疑問に思っていた。カンボジア文化である「伝統的産婆」の活躍の場がなくなってしまったことが、とても不思議だったのだ。そこで、最後のプレゼンテーションで、「伝統的産婆」が活躍できるような取り組みを、思い切って提案してみた。村の医師からかえてきた言葉は、「日本には『伝統的産婆』はいるか？」という質問だった。そののち、「伝統的産婆」の役割を具体的に知ることができ、彼女たちが、いかに苛酷な仕事をこなしていたか、が分かった。乳幼児死亡率が高かったことを考慮すると、彼女たちは、とりあげた赤ちゃんが死亡してしまう、という経験を何度もしているのだ。しかも、お産に関する知識も得られぬまま、受け継がれた方法を頼りに、しかし、自分たちの無力さを体験しながら、仕事をこなしてきたのだ。私は、なんと無責任な提案をしてしまったのだろうか、と思った。と同時に、提案したからこそ、「伝統的産婆」について、より深く知ることができた、とも思った。

一方で、PHJによる母子保健の取り組みは、妊産婦・乳幼児をはじめ、村人たちに大きな喜びを与えていると感じた。村の妊産婦は保健センターの必要性を認識しており、積極的に利用している方々が多く、心配事があれば、村の保健ボランティアの方々を頼っていた。PHJはカンボジアの母子保健の改善を手助けし、村人たちの保健意識を変え、自立を支援しているのだと感じた。それが、死亡率低下という効果をもたらしていた。

コンポントムにはたった3日間の滞在で、カンボジア母子医療についてほんの一部しか見聞きすることができなかったが、村の方々と会話で、生活がより良くなったことがうかがえた。他国の文化を変えることは覚悟があることだと思うが、その国にとって必要なことを知り、信頼関係を築くことにより、相手国の受け入れ態勢が整うことも学んだ。今回このような学びの場を与えていただいたことに、心より感謝します。PHJスタッフの皆さま、カンボジアの村の方々、ありがとうございました。

谷川裕子



## オー・クン・チュナム, カンボジア

いつか訪れたいと思っていたカンボジア。自分の目で実際に見てみたいと思っていた外国の母子保健の現状。両者が一度に満たされてしまう、今回のスタディツアーに思わず飛びついた。ドキドキわくわくと胸の高鳴りは治まることはなく、あっという間に8日間は過ぎていった。

まず初めに降り立ったのは首都プノンペン。暑い...。2月の日本は雪がまだ残っていたので、少しむっとする空気に身体が驚いたようだった。空港の出口には、いつかの番組で見たように、ツアー名のフリップを笑顔で掲げるガイドさんがずらり。念願のカンボジアへ本当に訪れたのだ...。バスで街を走ると、一台に何人もまたがるバイクに取り囲まれた。現実こんな光景があるのか...。見るものすべてが新鮮で、次から次へと目が奪われていった。

カンボジアは近い歴史に内戦があった。自分の親世代の記憶にあるくらいだから本当に新しい。知識人や影響力の強い人材とその家族の尊い命が多く奪われた。キリング・フィールドやトゥール・スレン博物館で見たもの、聞いたことは簡単には自分の中で消化しきれなかった。この歴史を忘れないことが唯一私にもできることなのかもしれない...

さて、カンボジアでトップクラスの産科医療が提供されている、国立母子保健センターを訪問させていただいた。最も印象的であったのは、男性優位の考え方が根強い国で、産科に多くの男性の姿が見られたことだ。街では今、夫の立ち合い分娩も増えてきているという。そして、分娩数の多さや助産師の不足から、母子の看護のほとんどを家族が担う現状を目の当たりにした。一方、コンポントムでは、保健行政区病院、保健センター、村を訪問させていただいた。衛生に関する意識は高く、各機関や職種間の連携が図られていた。村の課題はまだ多く存在するが、新しい情報や支援に対する受け入れに柔軟である印象を受けた。文化や価値観は大きく違えど、周囲のみんなが母子を支えていこうとする姿勢は日本と共通するものを感じた。

今回のツアーでは、カンボジアの医療や村の現状、歴史を学ぶことができた。神秘的な遺跡の数々にも圧倒されるばかりで、もう一度訪れたい国のひとつとなった。バイタリティーあふれるツアー参加者やスタッフさん、現地のみなさんなど、多くの方々と素敵な出会いに恵まれ、学びの深い充実した時間を過ごすことができた。これまでの自分を振り返り、目標を整理する重要な機会にもなった。医療従事者として、国際保健に関わっていくための大きな一歩、この貴重な経験はこれからの自身の活動に活かしていきたい。

中濱 摩美



# カンボジアスタディーツアーを終えて

「カンボジア×農村×保健」という、私の興味をかきたてるフレーズに惹かれ申し込んだスタディーツアーは多くの「出会い×体験×感動」を与えてくださったツアーでした。

ずっと興味をもってJICAの活動を知ることができ、また、現地でのNGOの活動を見て聞いて感じることができたことは大きな収穫でした。

印象に残ったのは村の女性と子供たちの暮らし。私の目にうつった村の暮らしは、とても質素で、清潔とは言えないもの。結婚して、子供を産み、そして、育てる。与えられた命を全うするために、生きるために生きている。初めは、そう感じました。次第に、それが文化であり、風習であり、彼女らにとっては幸せであることが伝わってきました。

そんな村で、PHJは必要な支援を模索し、村人と一緒に考えて実施されていました。トイレの無かった村に、トイレを普及させる活動をしたり、不衛生であった生活用水には浄水器を設置する活動をするなど。それに対し、村人はそれを必要と感じていると話されており、PHJと村人との間には信頼関係が築かれていることを知る機会にもなりました。

カンボジアにいた約1週間は、岩手で生活している3人の子供たちが何度も頭にうかびました。それと同時に、カンボジアの小さな子供たちに目が向いていた私でした。私たち観光客を見ると、すぐに近づいてきて物を売る子供たち。今、何を考えているんだろう？好きでやっているのだろうか？家庭環境はどのようなだろう？など。カメラを向けると、そこには、我が家の3人の子供たちと変わらない、笑顔がありました。しかし、子供たちがそんな生活をしないといけな背景には、「貧困」があることが容易に予測できました。



今回のツアーで見たこと聞いたこと体験したことは、ほんの1部かもしれませんが、リアルなカンボジアに触れることができ、貴重な体験となりました。そして、ツアーを終え新しい目標ができました。まずは自己のレベルアップを！と、来月から新しい職場に挑戦してみることにしました。また違ったフィールドで自分を鍛えていきたいと思います。

最後になりますが、素晴らしいカンボジアを見せてくださったPHJのスタッフの皆様には感謝しています。そして、ツアー中、楽しくも良い刺激を与えてくれた参加者の皆様、出会えて良かったです。これからもPHJの活動に興味を持ていきますので、どうぞ宜しくお願いいたします。また、お会いできますように。

新沼千尋





## さいごに

PHJの2014春スタディツアーにご参加いただきありがとうございました。  
企画・準備期間はいつも、人が集まるのかと、はらはらどきどきしています。  
今回、9名もの方々に参加いただき、そしてそれぞれの熱い思いを持って現地に行っていたきました。

コンポントムからシェムリアップへ行く時に皆様に感想を言っていたきましたが、地域の保健スタッフや村の人とのいい出会いを持てたことや期待していたような成果があったことがわかって、私もうれしかったです。

PHJの活動は地味ですが、私たちの使命でもある「人を育てる」ことを中心にして草の根に根付いていく活動をしていると自負しております。日本の日常生活に戻るとカンボジアの熱い空気を忘れてしまうかもしれませんが、時々あの出会いを思い出して、何か途上国と関わり合いを続けるようなアクションを起こしていってくれれば、とてもうれしいです。私もPHJの活動をより良いものにしていくように努力を続けたいと思います。

PHJ 海外事業部担当 中田好美



アジアの母と子をささえる 国際保健医療支援団(認定NPO法人)



編集: 南部道子  
表紙デザイン: 南部良太